

「気管分岐部を閉塞する猫のポリープ型扁平上皮癌に対し気管支鏡下に高周波スネア切除およびアルゴンプラズマ凝固を行い、長期 QOL 維持可能であった 1 例」 一会場での討論

Q 1 : 人だと肺や気管支の扁平上皮癌は主に喫煙の影響によって生じると考えられ、肺の腫瘍としては比較的多くみられますが、動物でもよくみられるのでしょうか？

A 1 : 動物では肺や気管支の腫瘍として扁平上皮癌は非常にまれとされております。動物では直接喫煙の影響は少なく、あったとしても受動喫煙となるからかもしれません。しかし、これまで獣医領域では診断手段に乏しかったことも発見が少なかった要因かもしれません。今後、気管支鏡などの診断ツールが獣医療にも広く導入されれば、現在認識されている以上に気道の扁平上皮癌が発見されるかもしれません。

Q 2 : 獣医療では放射線治療は行われないのでしょうか？ この症例は内視鏡下切除後、なぜ放射線治療を行わなかったのでしょうか？ 人でしたら治療計画のひとつに入ります。

A 2 : 獣医療でも放射線治療は現在一部の施設で行われています。ただ、獣医療では不動化のために治療ごとに全身麻酔を行わなければいけないので患者の状態や飼い主の受入れも必要となります。私自身が不勉強であって、扁平上皮癌には放射線治療は有効性が低いと認識しておりました。また、飼い主様自身が頻回の全身麻酔に強い抵抗を示されておりました。

また、呼吸器インターベンションを御専門とされている東京医科大学茨城医療センター呼吸器外科の古川欣也先生に、気管支鏡下ポリープ型腫瘍の切除に関し、手技上は全く問題なく、人と同様に内視鏡下気管内腫瘍切除術がおこなれていることに非常に驚かれたとのコメントをいただきました。むしろ、人医領域でもこれほどきれいに切除されることは少ないのではないかと思えるほどだとの御評価をいただきました。